

あきた病院に入院した重症心身障害児者の予後に関する研究 —生前の臨床像と死亡年齢の関連—

白 崎 和 也[†]

IRYO Vol. 79 No. 2 (66–71) 2025

要 旨

【目的】重症心身障害児者の予後に影響をおよぼす因子を明らかにする。【対象および方法】国立病院機構あきた病院（当院）に入院した重症心身障害児者のうち2004年4月1日から2023年3月31日までの間に死亡した計110名（男64名，女46名）を臨床因子によって分類し，各群の死亡年齢を比較した。【結果】以下の臨床的特徴を有する群の死亡年齢が統計学的に低かった。①運動障害で寝たきりの状態，②高度の脊柱側彎症を合併，③基礎疾患の脳障害が胎生期に発生，④胃管による経管栄養の導入後も嘔吐，誤嚥などの消化器系症状が改善しない，⑤酸素療法，気道管理，人工呼吸療法などの呼吸器系ケアを要する。【結論】①から⑤の臨床因子は重症心身障害児者の予後リスク因子であることが示唆された。

キーワード：重症心身障害，予後，死亡年齢

はじめに

日本で「重症心身障害」が用語として初めて使用された頃，重症心身障害児の長期生存は難しいといわれた¹⁾。近年，高齢の長期入院例も認められるようになったが，重症心身障害児者の予後に関しては，大規模な疫学調査が行われていないため正確な実態は把握されていない。われわれは，国立病院機構あきた病院に入院した重症心身障害児者の予後調査（2023年）を実施し，死亡例の臨床像と死亡率について報告した²⁾。今回は，予後に影響をおよぼす臨床因子を特定するため，死亡年齢と臨床像の関連に

ついて分析した。

対象および方法

当院は，国立医療機関の再編成によって2004年4月1日に開設された。前身は国立療養所秋田病院で，重症心身障害病棟は計160床である。2023年に実施した予後調査²⁾では，当院に入院した重症心身障害児者のうち2004年4月1日から2023年3月31日までに死亡した例を対象とした。この時の調査情報に基づき，今回は死亡時年齢を予後の指標として，各臨床因子（入院時期，基礎疾患，運動障害，合併症，

国立病院機構あきた病院 小児科 [†]医師著者連絡先：白崎和也 国立病院機構あきた病院 小児科医師 〒018-1393 秋田県由利本荘市岩城内道川字井戸ノ沢84-40
e-mail: vezel3249@icloud.com

(2024年6月12日受付 2025年2月21日受理)

Study on the Prognosis of Patients with Severe Motor and Intellectual Disabilities Admitted to NHO Akita National Hospital: Relationship between Clinical Features and the Age at Death

Kazuya Shirasaki

Department of Pediatrics, NHO Akita National Hospital

(Received Jun. 12, 2024, Accepted Feb. 21, 2025)

Key Words: SMID, prognosis, age at death